徳野遺跡（B地点）

宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

可児市教育委員会

1996. 3

はじめに

木曽川や可児川の豊かな水にめぐまれ可児市は、川沿いに点々と遺跡が分布し、緑の丘陵には多数の窯跡が点在するなど、古くから歴史と文化に育まれた土地であります。

今回、可児川を南にのぞむ徳野地区で宅地開発が実施されることとなり、徳野遺跡の一部を発掘調査して記録保存を図ることとなりました。残暑厳しい中、短い期間での調査でありましたが、古墳時代の住居址をはじめ多くの遺物や遺構を検出し大きな成果がありました。調査地点の南側では、昭和61年土地区画整理事業に伴い一部発掘調査を実施しておりますので、二つの成果を合わせ、可児の古代を考える貴重な資料となれば幸いと存じます。

最後に、本調査をおこなうにあたり、佐橋節夫氏やサカイ創建株式会社をはじめとする多くの人々にご協力いただきましたことを厚くお礼申し上げます。

平成8年3月29日

可児市教育長　渡　辺　春　光

例　言

1. 本報告書は、岐阜県可児市下恵土字高嶋3307-1、3306-1の発掘調査報告書である。
2. 徳野遺跡については、昭和61年土地区画整理事業に伴って一部を発掘調査している。
   本報告書では、今回の調査地点を徳野遺跡Ｂ地点とし、昭和61年実施した地点をＡ地点とした。
3. 発掘調査は、宅地開発に伴う緊急調査で、サカイ創建株式会社から可児市が委託を受け、可児市教育委員会が実施した。
4. 発掘調査の体制は次のとおりである。

可児市教育長　渡辺春光
教育部長　宮島凱良
社会教育課長　奥村晴保
　同課長補佐　奥村幸彦
　同文化係長　亀谷泰隆
　同調査担当　吉田正人
　同　庶務　水野真季

現場作業員
　伊沢幸一　北西幸彦
　香田公夫　水野良雄

遺物整理
　前田有子　伊藤美砂

5. 本書の編集、執筆は、亀谷泰隆が担当した。遺物の実測とトレースは前田有子がおこない、遺構のトレースを、前田有子と伊藤美砂が、写真撮影を、亀谷泰隆が担当した。
6. 発掘調査の関係資料は、可児市教育委員会（可児郷土歴史館）が保管する。
7. 本調査では、佐橋節夫氏、サカイ創建株式会社に大変お世話になった。

発掘調査に至る経過

平成7年7月24日、下恵土字高嶋地内で宅地開発を実施する事前協議が企画調整課土地対策係から可児市教育委員会にあった。

市教育委員会は、開発予定地が周知の遺跡「徳野遺跡」遺跡番号G34K4727の北端にあたる可能性が高く、開発にあたっては埋蔵文化財の有無を確認するため試掘調査を実施する必要のあることを回答した。その後、開発事業者のサカイ創建株式会社や地権者との間で埋蔵文化財について協議し、9月12日から試掘調査を実施することとした。

試掘調査は、幅2メートルのトレンチを開発区域内に3本設定し、遺構などの確認のため地山まで掘り下げる方法をとった。試掘2日目には、調査区より器台が出土し、その後明確な遺構は検出されなかったが、小型台付甕や壺などが出土したため、徳野遺跡の北端と判断。開発事業者や地権者と協議し発掘調査を実施して記録保存を図ることとした。

本調査は、9月20日から開始し、重機で表土を除去してから遺構等の検出に努めた。その後、土器などの出土遺物のほか住居址2軒を検出し、9月28日で調査を終了した。遺物整理は、現場での発掘作業終了後、引き続き、3月まで可児郷土歴史館で実施した。

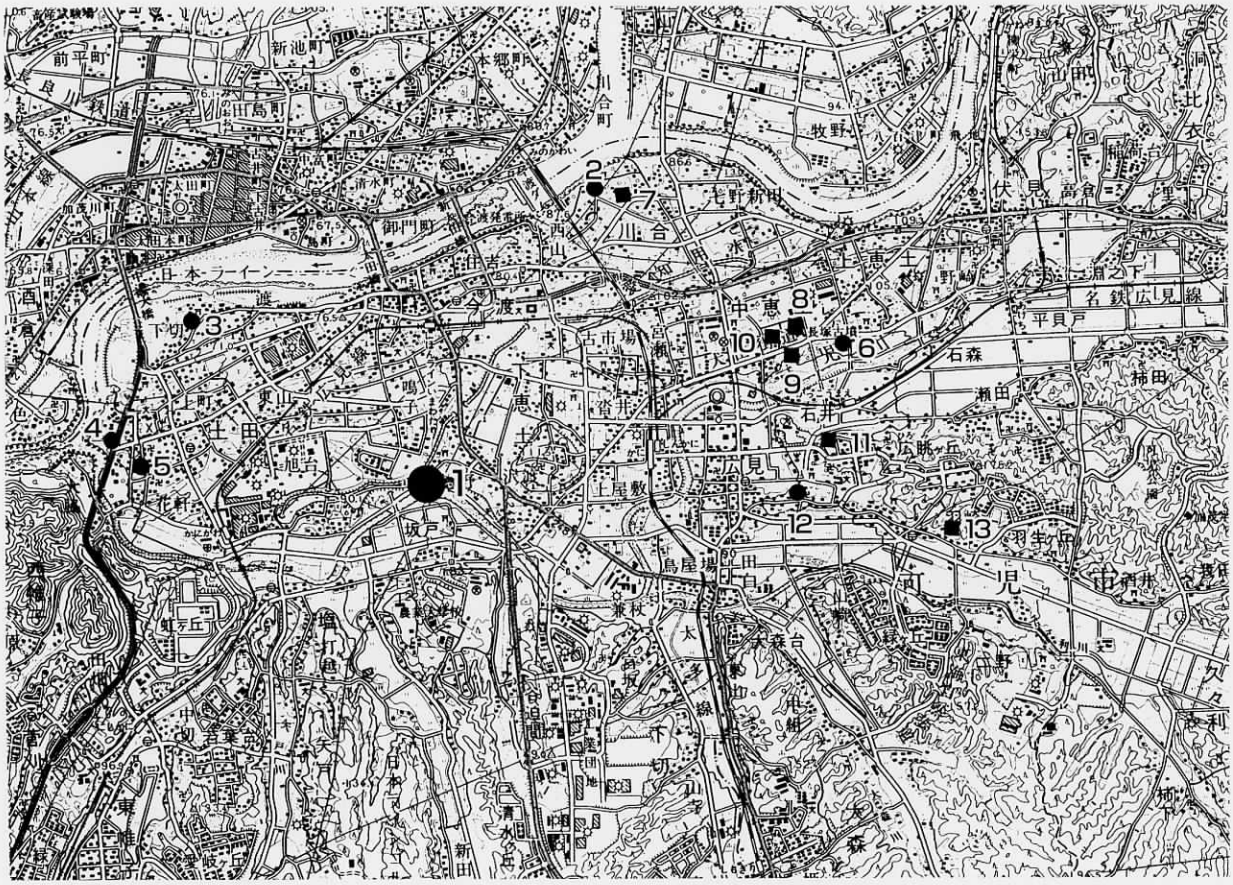
図1　トレンチ設定図

遺跡の立地と環境

可児市は岐阜県の東南部に位置し、木曽川を隔てて北は美濃加茂市、東は御嵩町、南は多治見市、そして、西は鳩吹山の山塊を隔てて愛知県の犬山市に接している。昭和40年代の後半から、名古屋のベッドタウンとして宅地開発が進み、市南部の丘陵地を中心に大規模な住宅団地の造成が相次いで人口急増を遂げた市である。

地形は、北を流れる木曽川と市中央を西流する可児川によってつくられた河岸段丘が市の北部によく発達し、肥沃な沖積面を形成している。また、河岸段丘は三段に分かれ土田・今渡・川合地区の低位段丘、下恵土・中恵土の中位段丘、坂戸上野・禅台寺の高位段丘となっている。また、市の南部は、哺乳動物の化石を産することで名高い第三紀中新世の中村累層と平牧累層で、この上に土岐砂礫層が堆積して、なだらかな丘陵地を形成している。

一方、歴史的に可児市を見れば、北部の平坦な沖積面に各時代の集落址や古墳が数多く分布している。主な遺跡は図2に示すとおりで、木曽川沿いには宮之脇遺跡、袖裏遺跡、北裏遺跡、宿遺跡などが分布し、古墳時代になると、集落址のほかに前方後円墳の長塚古墳や野中古墳、前方後方墳の西寺山古墳、円墳の御嶽古墳、白山古墳などの前期古墳が築かれ、木曽川沿いには川合古墳群や土田渡古墳群などの後期群集

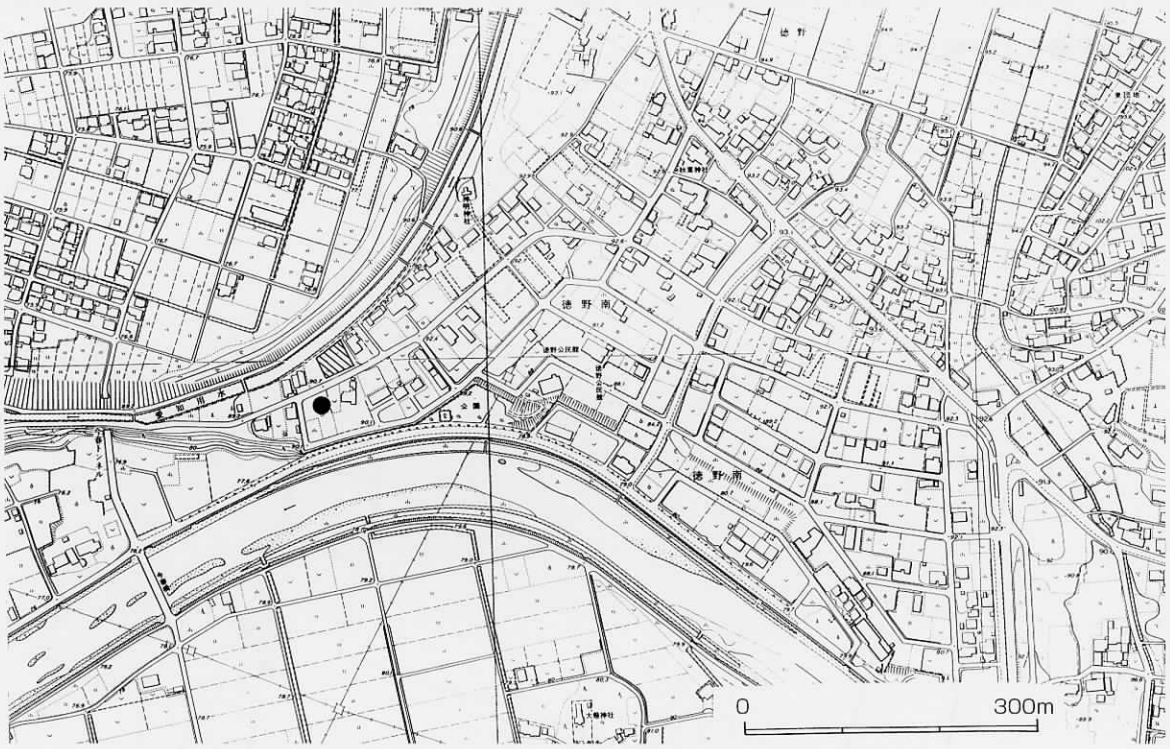


1 徳野遺跡　2 宮之脇遺跡　3 袖裏遺跡　4 北裏遺跡
5 宿遺跡　6 欠之上遺跡　7 川合次郎兵衛塚1号墳　8 長塚古墳
9 西寺山古墳　10 野中古墳　11 身隠山古墳（御嶽・白山古墳）
12 熊野古墳　13 羽崎中洞横穴墓

図2　周辺の遺跡

墳が分布する。また、可児市は窯跡が多数分布することでも知られ、市南部の丘陵には平安から室町時代にかけての窯跡が点在し、桃山時代、志野や黄瀬戸、瀬戸黒、織部など桃山茶陶を焼いた大萱、大平の窯へと引き継がれていった。

今回調査した徳野遺跡は、前述の中位段丘が可児川に浸食され細長く西に延びた所に位置し、低位段丘との比高差約15メートルの段丘涯沿いに存在する。土地利用は、桑畑として長く利用されてきたもので、調査区の南は昭和63年度に土地区画整理がおこなわれ、付近一帯は良好な住宅地として開発が著しい。また、調査区の南隣接地（A地点）は、昭和61年区画整理に伴って発掘調査が実施されている。



調査区域（徳野遺跡）B地点　　● 徳野遺跡 A地点

図3　徳野遺跡位置図

層　序（図4）

発掘調査区は、耕作地として長く利用されてきた。地形的には、北の段丘崖に向かって下がる地形で、地表から地山までの深さは、平均40～50センチメートル、南の市道沿いでは70センチメートルであった。

層序は、場所によって違いはあるが、基本的には地表から約15センチメートルが耕作土で、その下に黒褐色土層、黄色褐色土層、地山となっている。遺物は、地山を除いた3つの層にそれぞれ包含される。

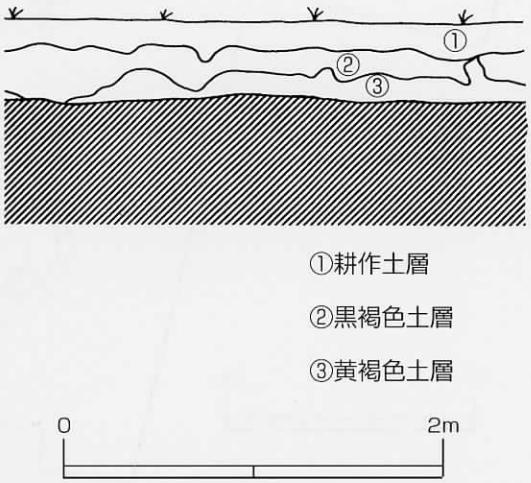


図4　土層図

遺　構　と　遺　物

Ⅰ．遺跡の概要

徳野遺跡は、昭和61年おこなわれたＡ地点での発掘調査や遺物の分布調査の結果、中位段丘が細長く西方に延びる根元部分の平坦地に広がる遺跡で、広範囲に遺物の散布が認められる。遺跡の北と南は、比高差約15メートルの段丘崖となり、南には可児川が真下を流れる。

散布する遺物は縄文土器から近世の陶器までと時代幅が広く、かなり大規模な複合遺跡の可能性が高い。今回の調査区からは、縄文の住居址は検出されなかったものの石皿が出土し、古墳時代の住居址2軒と円形の土壙などが検出された。

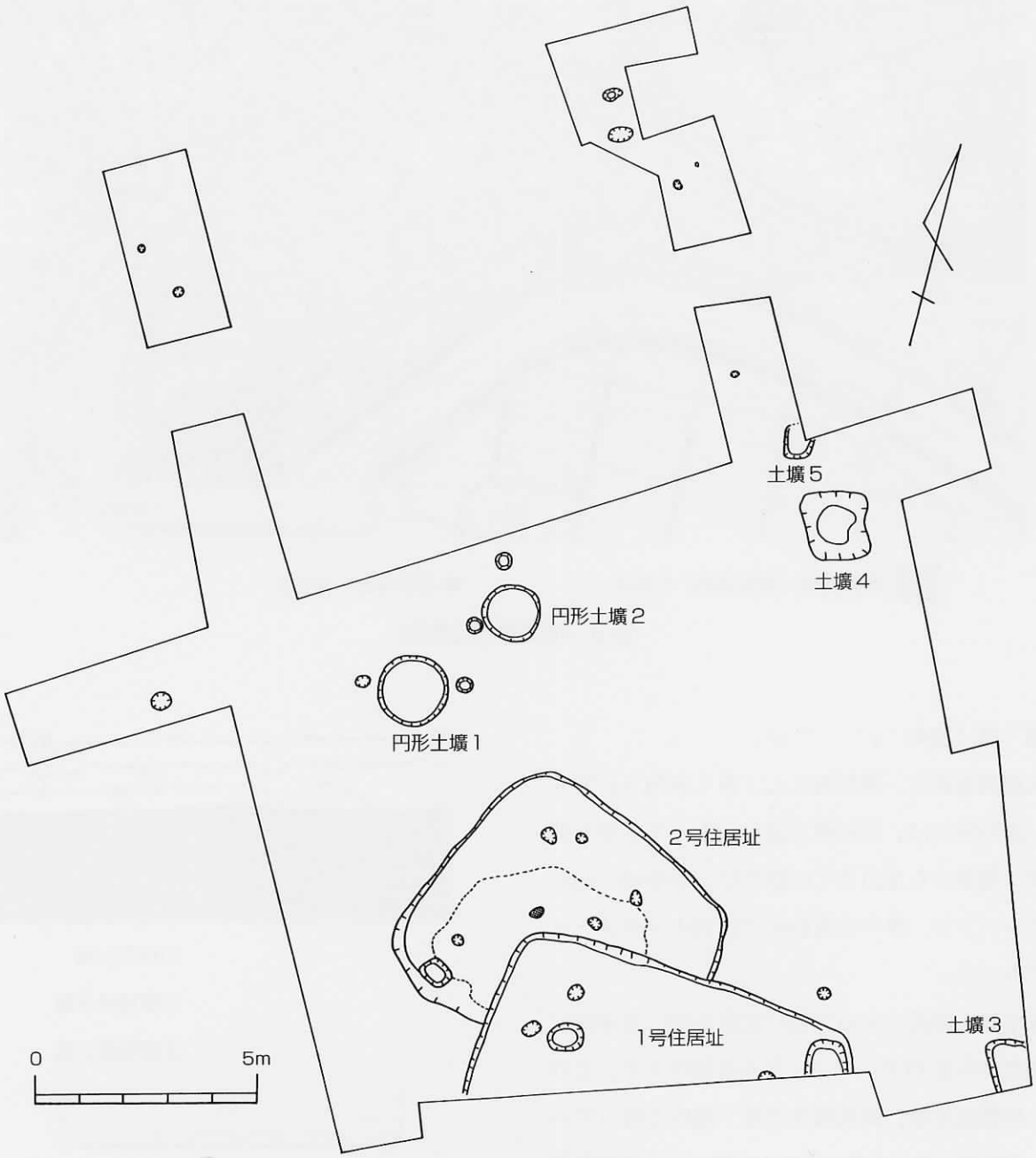


図５　調査区遺構位置図

Ⅱ．遺　構

1．住居址

（1）１号住居址（図6、図版３）

調査区南中央から検出されたもので、2号住居址を掘り込んでつくられていた。一辺約8メートルの方形で、主軸はほぼ南北方向である。南半分は調査区域外で未調査となっているが柱穴と推定されるピットは、調査の範囲内で床面から4か所検出され、大きさや深さから4本（P1, P2）の主柱穴を持つ住居址であった。また、壁面にそって幅40センチメートル、断面が台形の溝がめぐり、北東隅には深さ約45センチメートルの長方形の貯蔵穴がある。調査範囲内からは、炉址やかまどは検出されず、また床面は固くなかった。

出土遺物は、北東隅にある貯蔵穴の西壁よりの覆土から高杯の脚部（図9-6、図版9）が一点出土したのみで、その他住居址に伴った遺物は検出できなかった。

（2）２号住居址（図6、図版３）

1号住居址の北にあり、南東側約三分の一が1号住居址で切られている。一辺の長さ約5.5メートル×６メートルの隅丸の方形で、主軸は北東方向である。1号住居址のような壁をめぐる周溝はなく、南の壁面は不明瞭であった。柱穴と思われるピットは床面から5か所検出されたが、位置や大きさなどから4本（P4, P5, P6, P7）の主柱穴を持つ住居址であった。

床面は、図の破線で示した範囲内が非常に固くしまっており、ほぼ中央には焼土が見られ、炉址であった可能性が高い。また、南西の隅には、貯蔵穴らしき方形の土壙があるが、後世の攪乱かどうか判然としない。

この住居址に伴う遺物はなく、覆土上部から土師器の破片や山茶碗等が出土したのみであった。

2．土　壙

（1）円形土壙１（図6、図版５）

調査区中央より検出されたもので、直径約1.55センチメートルのきれいな円形の土壙であった。深さは地山から約10センチメートル、底部は平らで明確にプランが検出されたが、出土遺物は検出されなかった。また、これに付随するような形で、直径40センチメートル、深さ9センチメートルのものと直径50センチメートル、深さ18センチメートルの穴が両側から挟むような形で検出された。出土遺物などがなく、性格や時代等は明らかにすることができなかった。

（2）円形土壙２（図6、図版５）

円形土壙1の北東より検出されたもので、直径は約1.30センチメートルと円形土壙１に比べやや小振りである。深さは円形土壙１と同様約16センチメートルで底部は平坦。直径45センチメートル、深さ19センチメートルのものと直径40センチメートル、深さ11センチメートルの二つの穴がやはりこの円形の土壙をかこんでいる。

出土遺物などがないため、所産時期等は不明であった。

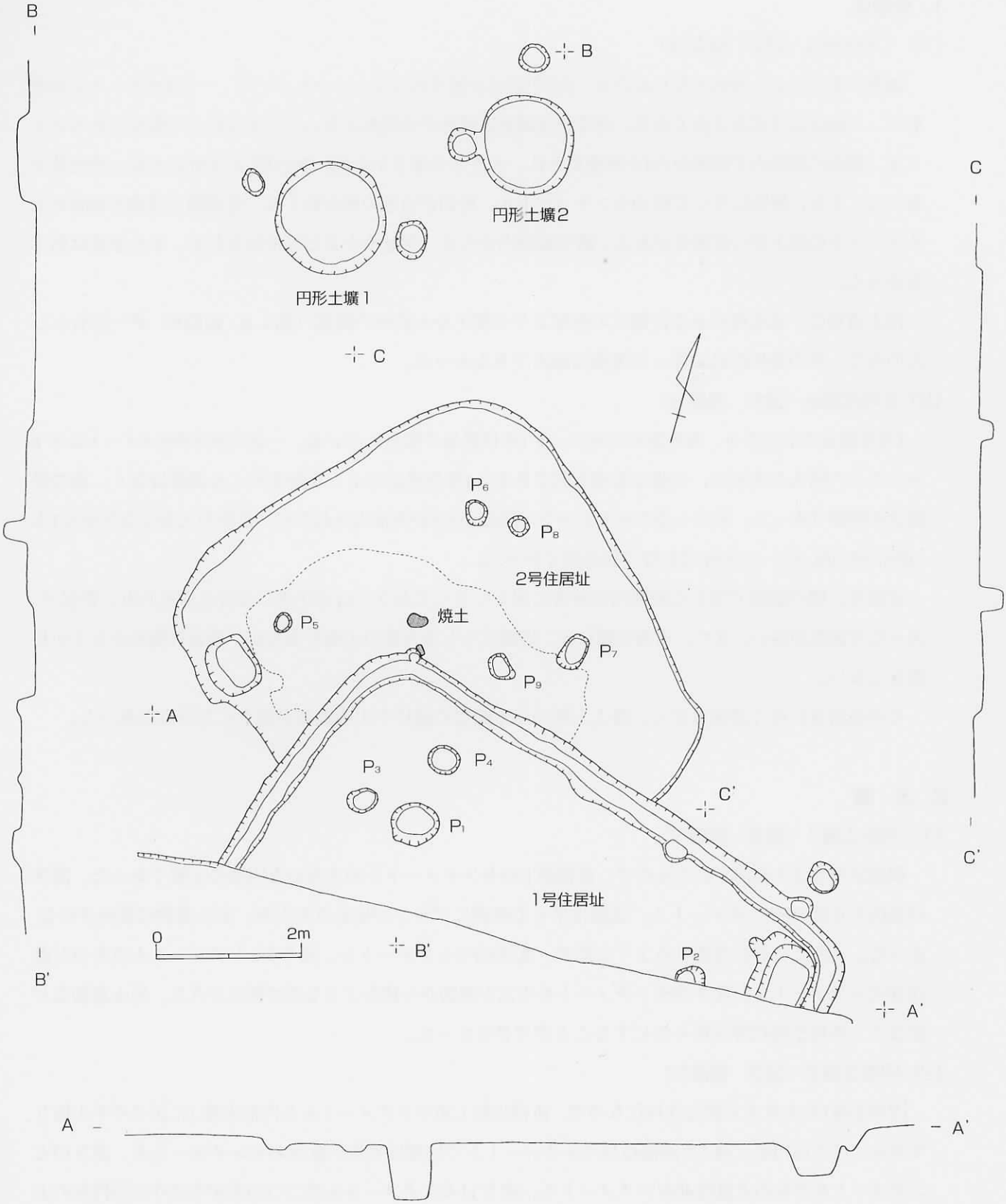

B
B
円形土壙2
円形土壙1
C
C
P6
P8
2号住居址
P5
焼土
P7
P9
A
P3
P4
C'
P1
C'
1号住居址
0
2m
B'
P2
B'
A'
A
A'

図6　遺構実測図

3. その他

調査区内からは円形の土壙のほかに、Ｂトレンチの北端に柱穴状のピットが2か所検出された。図7で示したように、一つは30×50センチメートル、深さ27センチメートル、ほかの一つは直径約25センチメートル、深さ24センチメートルであった。住居址の柱穴の可能性があったため、周辺を拡張したが、小石の詰まった深さ35センチメートルの土壙を検出したのみで、壁面の立ち上がり等、積極的な住居址の痕跡は見つけることができなかった。また、この他、方形の土壙（図5、土壙3、土壙4、土壙5）を三つ検出したが、いずれも出土遺物等がなく、時期や性格を知ることができなかった。

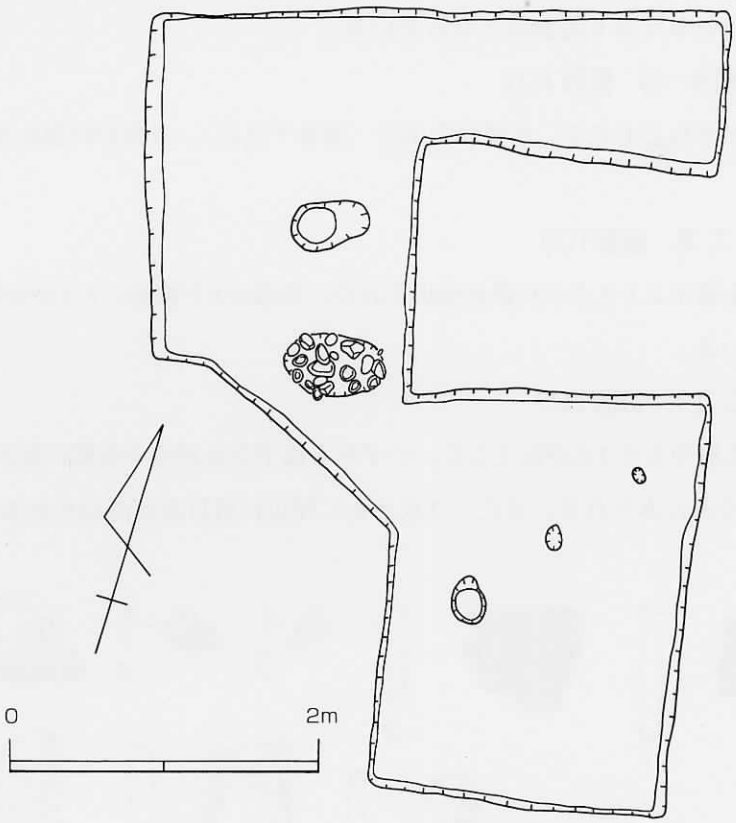


図7　Ｂトレンチ北部拡張区　実測図

Ⅲ．出土遺物

1．縄文時代

(1) 土器（図8－1, 2）

耕作土層中より図8－1, 2 に示す土器が出土した。1は縄文時代中期後半に属すもので、竹管による沈線文が菱形の格子にひかれている。2は沈線によるあや杉文のある胴部破片で、同じく中期後半の土器に比定される。

(2) 石鏃（図8－3　図版10）

調査区内で一点を表採した。安山岩（通称下呂石）製の開脚形で、長さ1.8センチメートル。細かな剥離をおこなって作られており鋸歯状となっている。

(3) スクレイパー（図8－5　図版10）

耕作土中より検出されたもので、石質は安山岩（通称下呂石）。三角形の剥片の一辺に刃部を加工したものである。

(4) 石斧（図8－6, 7, 8　図版10）

耕作土、黒褐色土層中より3点の石斧が検出された。形体は6が撥形、7, 8が短冊形で、7は刃部が使用により摩耗している。

(5) 凹石（図8－10, 11　図版10）

耕作土、黒褐色土層中より2点が出土した。いずれも偏平な丸石の中央部に窪みがあるもので、10は両面に、11は片面のみにみられる。また、2点ともに周辺に敲打面が認められる。

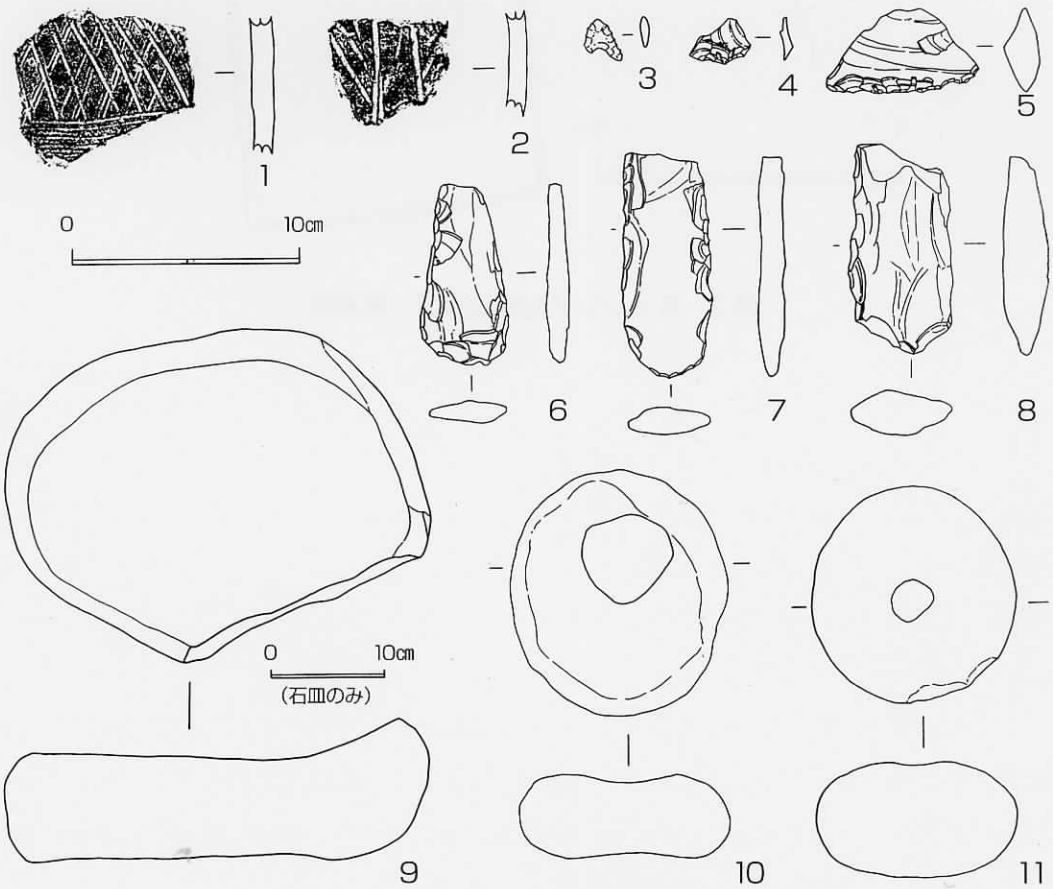


図8　縄文時代出土遺物

(6) 石皿（図8－9）

Bトレンチから出土したもので、地山から約10センチメートル上の黒褐色土層中から検出された。長径37センチメートル、短径30センチメートルの楕円形で、中央部が縁より約3.5センチメートル窪んでいる。凹面はよく研磨されており、石質は砂岩系の石である。

2. 古墳時代

土師器（図9－1～9　図版7～9）

今回の出土遺物の主体をなすもので、実測可能なものが6個体出土した。出土地点は図9-6が1号住居址の貯蔵穴覆土からで、その他の5個体は、Bトレンチの黒褐色土層中であった。いずれもほぼ同一のレベルからの出土であったが、これらの土器に伴う明確な遺構を検出することができなかった。なお、出土レベルは、地山より約10センチメートル上部である。

(1) 高杯（図9－6　図版9）

1号住居址の貯蔵穴から出土した。脚部のみで杯部は欠損する。脚部は大きくラッパ状に開く形をとり、円形の透かし穴が四か所つく。外面は、縦方向のヘラなでがおこなわれ、内面は横方向の整形痕が残る。また、脚部の端部には煤の付着がみられ、内側は特に顕著である。その形態から廻間のⅢ式期にあたる。

(2) 小型台付甕1（図9－3　図版8）

Bトレンチ南端より出土した。口径8.1センチメートル、器高9.4センチメートルを測り、器厚は5ミリと厚い。全体に丸味を帯びており、胴部と台部の外面にはハケメが全面に見られる。口縁部は外面が少しくびれ、横方向のナデが見られる。小型の甕であるが、内面に煤の付着が見られる。

(3) 小型台付甕2（図9－2　図版9）

小型台付甕1と同じ所から出土した。口径10.1センチメートル、器高12.4センチメートルを測り、器厚は4ミリである。外面にはハケメが全面に見られ、口縁部は少しくびれて「S字状口縁」のくずれたものを思わせ、刻み目が付けられている。胴部上半に最大径を持ち、台部は直線的に開く。小型の甕であるが、やはり器面の外には煤の付着がみられ、煮沸に用いたことがわかる。

(4) 広口壺1（図9－1　図版7）

Bトレンチ南端の黒褐色土層中より出土した。胴下部が欠損し、全高は不明であるが、口径約18センチメートルを測る。器形は「く」の字に口縁が外反し、口縁端部に刻み目を付けるとともに粘土を貼りつけて「8」の字文などの装飾をつける。また、頸部にも刻み目を持つ細い隆帯を付ける。

胴部上半には、櫛状工具によるものと思われるも刺突文が二列めぐり、その間を浅い波状文で埋める。二段目の刺突文から下には朱彩が施され、器面全体は丁寧にナデ成形が実施されている。

(5) 広口壺2（図9－4　図版8）

Bトレンチ南端の黒褐色土層中より出土した。口縁部径14.5センチメートル、器高 27.5センチメートル、胴部最大径 27.5センチメートルを測る。口縁は「く」の字状に開き、胴部は下膨れとなっている。外面にはハケ目がなく、タテやヨコ方向のナデ調整が行われている。外面には煤の付着がみられ、煮沸に用いられたものと思われる。

(6) 器台（図9−5, 図版７）

Ｂトレンチ南端の黒褐色土層中より出土した。杯部は、口縁を厚く下部に折り返して沈線を引く。脚部の端部も杯部と同様上方へ折り返し、同じく沈線を付ける。透かし穴は4か所で、脚部下半で大きく外に開く。

(7) その他

また、この他多数の土師器片が出土したが、いずれも小片で器形等を復元するには至らなかった。図9-7, 8, 9 は「S」字状口縁を持つ甕の破片で、7は口縁のつくりがシャープで刺突文を持ち古式の様相を呈する。

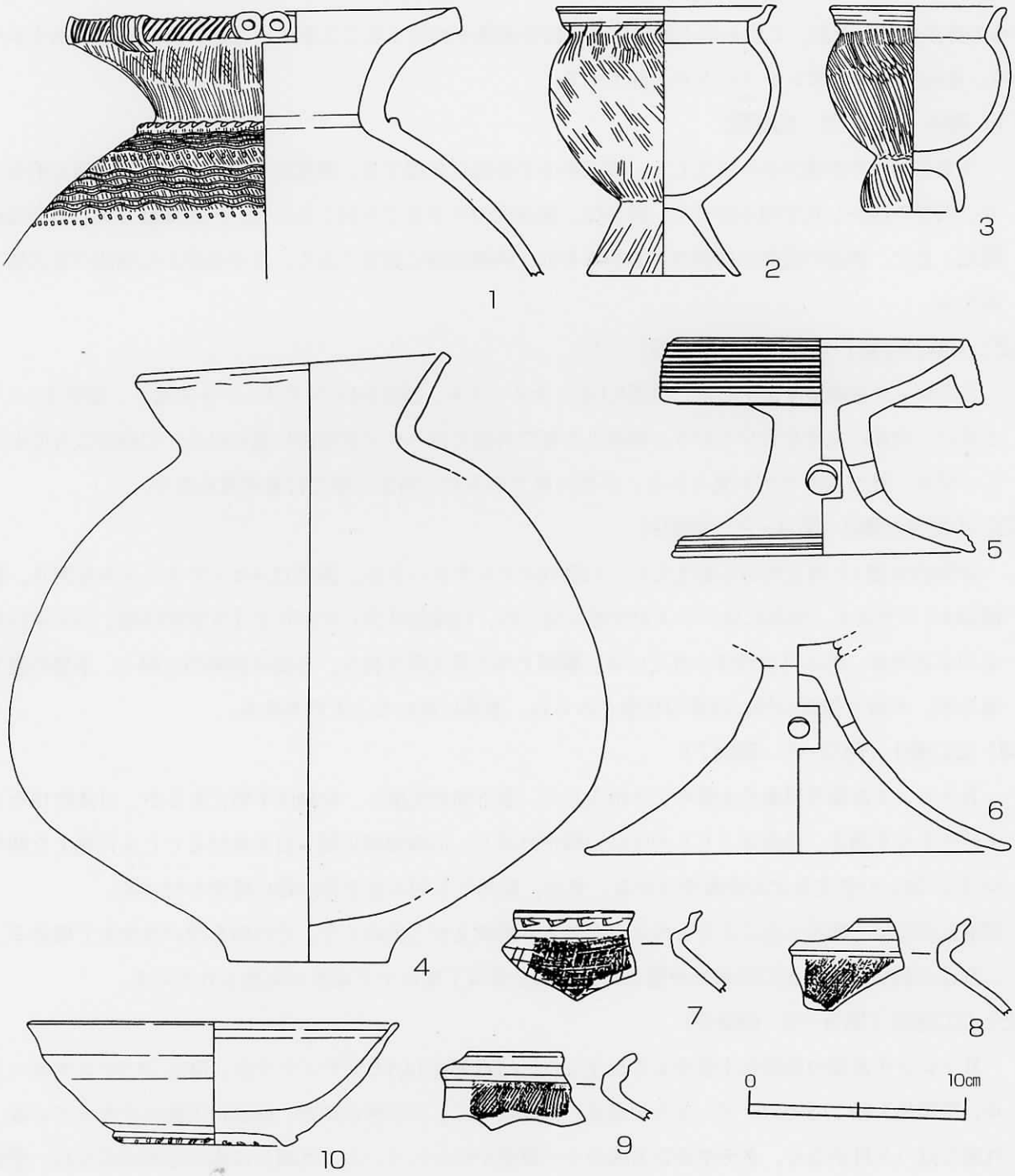


図9　土師器　実測図

3. 中　世

（1）山茶碗（図9－10　図版9）

口径17センチメートル、器高5.7センチメートルを測る山茶碗の碗で、2号住居址の黒褐色土層中からほぼ完形で出土した。これに伴う土壙等はわからなかったが、出土状態は上向きであった。全体の器形は丸みを帯び、口縁端部はやや外反する。高台は形がくずれ、籾殻圧痕がある。全体のつくりから12世紀前半、谷迫間2号窯期の碗に比定される。

ま　と　め

今回の発掘調査では、木曽川の中位段丘に広がる徳野遺跡の西北端の一部を調査することができた。徳野遺跡については、古くから「矢じり」の出土する遺跡としてその存在が知られ、周辺の家には拾い集められた石鏃がかなり保管されている。

また、昭和61年には今回の調査地点と市道を挟んだ南側（A地点）を調査しており、縄文時代から古墳時代にかけての遺構や遺物がまとまって検出されている。今回の調査では、縄文時代と弥生時代の遺物は少なかったものの、古墳時代を主とする遺構と遺物が検出された。

主な成果をまとめると、次のようになる。

1. 調査区内から古墳時代前期の住居址が2軒検出された。
2. 1号住居址の時期は、貯蔵穴から出土した高杯が廻間Ⅲ式期の土器に比定されることから4世紀前半に作られたと推定される。
3. 2号住居址の時期については、出土遺物が伴わなかったため明確ではないが、1号住居址との切り合い関係から1号住居址に先行するものと推定できた。
4. 徳野遺跡の集落は、今回の調査区を北端にして南にその中心があるものと思われる。
5. Bトレンチの黒褐色土層中からまとまって出土した土器であるが、広口壺1は口縁端部を刺突文や貼付文で飾り、胴上部を朱彩するなど古い要素を残し、沈線を巡らす垂下口縁をもつ器台とともに廻間Ⅰ式期の土器に比定される。その他の小型台付甕1、小型台付甕2、広口壺2は廻間Ⅱ式期から廻間Ⅲ式期に比定され、4世紀前半の土器であると推定される。
6. 縄文時代の明確な遺構は検出されなかったが、石皿と凹石（磨石）など良好な資料が出土した。

以上、今回の発掘調査による主な成果を列挙したが、宅地開発に伴う緊急な調査ということで準備も不十分なままで調査を実施せざるを得なかった。しかし、古墳時代の集落の一端を明らかにし、古式土師器の良好な資料を検出することができたことなど、大変意義深い成果があった。

参考文献

1. 可児町　「可児町史」通史編　1980
2. （財）愛知県埋蔵文化財センター　「廻間遺跡」　1990
3. 可児市教育委員会　「川合遺跡群」　1994

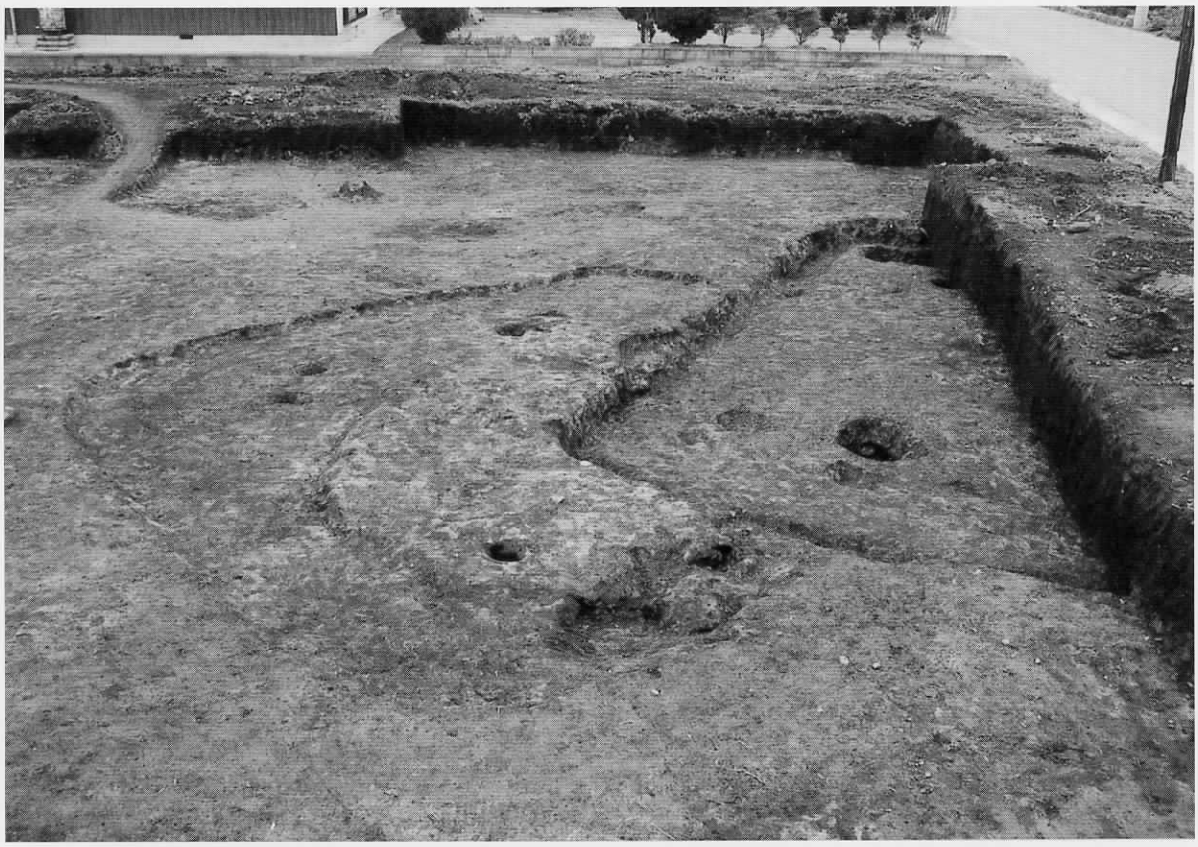
図版1

調査前全景

図版2

調査後全景

図版3



1号住居址・2号住居址

図版4

1号住居址　貯蔵穴

図版5

円形土壙

図版6

Bトレンチ北端拡張区

図版7

器　台

広口壷1

図版8

広口壷2

小型台付甕1

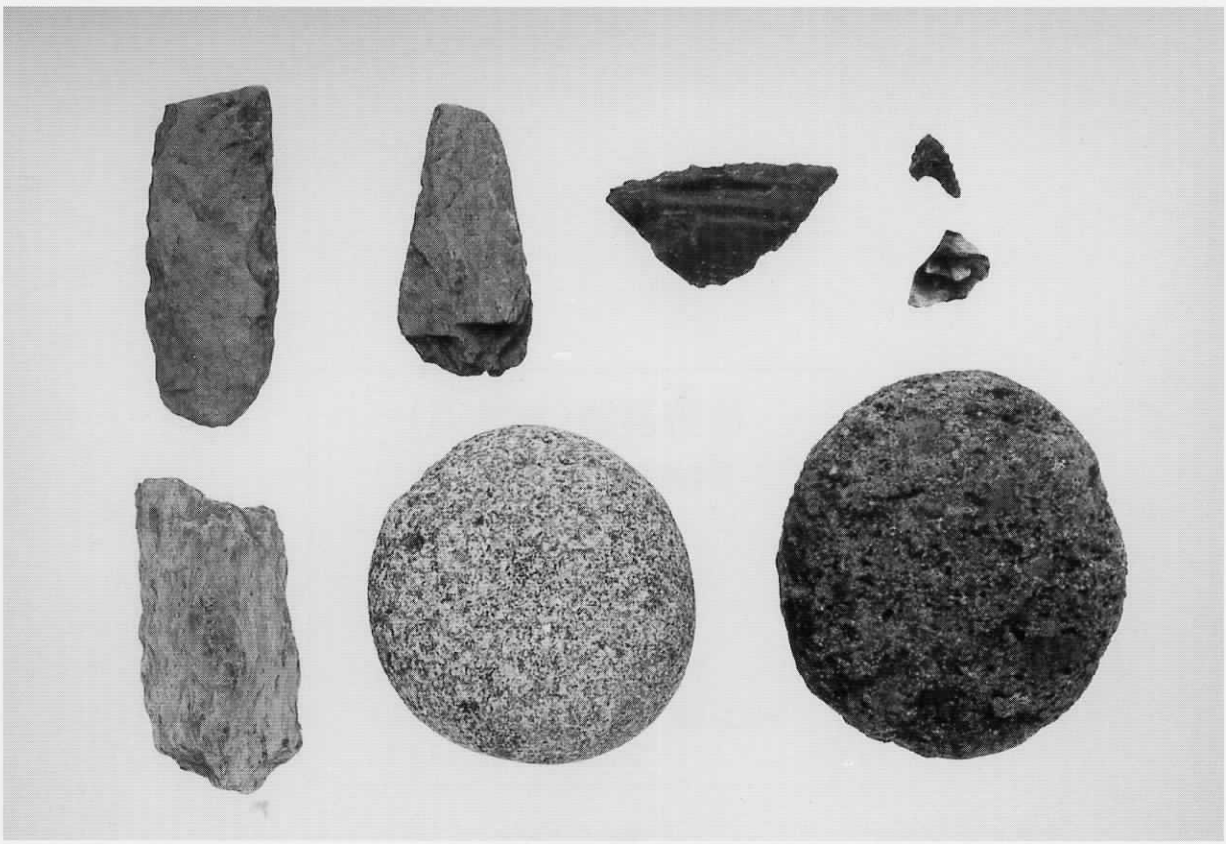
図版9

小型台付甕2

高　杯

山茶碗

図版10



石　器

徳野遺跡（B地点）
宅地開発に伴う埋蔵文化財
発掘調査報告書

平成8年3月29日発行

可児市教育委員会
〒509-02　岐阜県可児市広見1－1
TEL 0574 62－1111